

『不思議の国のアリス』をフランス語で読むと…

阿部静子

そこで帽子屋が謎々を出して

(カラスと書物机 どこが似ている?)

どこが似ているって その二つ

そっくりじゃありませんか

ぼくの庭ではいつも午後になると

大きな抽斗ひきだしが二つ

小さな抽斗が三つある

四角いカラスが来てガタガタ遊んでいるし

ぼくの机はぼくが遅くまで勉強していると

もう寝ろよ 阿呆あほう 阿呆あほうって啼きますよ

カラスと書物机 あんまりそっくりで

見分けがつかないくらいだなあ (以下略)

(辻征夫『謎々』より)

カラスと書物机、シユルレアリスト好みのミスマツチ——人を食ったようなこの詩の下敷きとなつてるのは言わずと知れ

たルイス・キャロル作『不思議の国のアリス』の一節である。1865年に英国で初版が出て以来、部分訳も含めれば全世界で130もの言語に翻訳されているというこの童話のもつ普遍性の一端を、上の詩が示しているとも言えよう。ここにあげた翻訳言語の数は聖書に次いで2番目に多いと言われる。一説には2番目は『星の王子様』だとも言われるが、知名度からいえば拮抗している両者も、こと翻訳の難易度から見れば『星の王子様』は『アリス』の比ではないだろう。もちろんそれは『アリス』には有名な艶語を含め、数多くの言葉遊びが全編に散りばめられているからだ。

ここではその『アリス』のフランス語訳について少し見てみたい。キャロル自身が指定した翻訳者、アンリ・ビュエによる訳がキャロルの厳しいチェックを経て出版されたのが1869年、それ以後、驚くことに17種類もの仏語訳が出ているという。かつて私はこのビュエ訳ともう一つ、現在もつともよく読まれて

いるというアンリ・パリゾ訳のテキストをそれぞれ別の年度に授業で読んだことがある。その際多くの興味深い事実に出会っただけでなく、翻訳という作業に潜む意外性を発見してその面白さにはまっています。

まずは前掲の詩に着想を与えたカラスと書物机の一節についてだが、これは「気ちがいがお茶会」の話の中で帽子屋がアリスに謎をかけるシーンのセリフで、原文では「Why is a raven like a writing-desk ?」（強調筆者。以下同様。）となっている。この謎々を巡っては少し後に帽子屋とアリスの間に次のような会話が交わされる。

“Have you guessed the riddle yet ?” “No, I give it up, what’s the answer ?” “I haven’t the slightest idea.”

つまりこの謎にはもともと正解が無い、ナンセンスなのである。そこでアリスは時間の無駄遣いと嘆くことになるのだが、この部分について、例えば邦訳者の一人、高橋康也氏は「大鴉とかけて、書物机と解く、心は？」と訳した上で「この三段なぞの答えはキャロル自身をはじめ多くの人が試みているが、『心はない』というのが正解かも。」という註をつけている。もともとキャロルは後に「どちらも多少の“notes”（書きつけ・鳴き声）を生み出す力をもつ。ただしどちらもまことに“flat”（たいらな「紙」・単調な「鳴き声」）である。」と、こじつけともいえる説明をしているようだ。結局、この2つの語が同じ

子音で始まるという点以外に両者には何ら共通性は無い、と考えた方が良さそうだ。

それではこの部分のフランス語訳はどうなっているのだろうか。まずはパリゾ訳――

“Pourquoi un corbeau ressemble-t-il à un bureau ?”（カラスは何故、机に似ているか？）で、“corbeau”と“bureau”に共通な“eau”（オー）で音合わせがされている。

次にアンリ・ビュエ訳――

“Pourquoi une pie ressemble-t-elle à un pupitre ?”（カササギは何故、書物机に似ているか？）

カラスをカササギに変えてまづ“pie”と“pupitre”に共通な“pi(e)”（ピー）で音合わせをしている。2通りの訳における音合わせは原文より明瞭になっていると言えるだろう。

そこで今度は原文ではっきりと音合わせがなされている箇所にはフランス語訳がどう対処しているかを見てみると、例えば次の「豚とこしう」の中のアリスと公爵夫人の会話の一節――

“You see the earth takes twenty-four hours to turn round on its axis.” “Talking of axes, chop off her head !”

ここではアリスの独り言を“axis”（軸）で遮った公爵夫人が、これと音の似た“axes”（斧）ともじって話を逸らしてしまうのだが、これをパリゾ訳は――

“Vous savez, en effet, qu’il faut à la terre vingt-quatre heures pour

ach...” “A propos de hache, tranchez-lui donc la tête !” “ever sa révolution autour du soleil.”としており、アリスのセリフを“ach...” (アッシュュ)で遮った公爵夫人がこれと音が等しく、かつ原文と同じ「斧」を意味する“hache” (アッシュュ)で話を逸らす形になっている。アリスのセリフは中断された“ach...”と“ever”で“achever” (成し遂げる)の語を作り、前後2つで1つのセリフが完結する形になっているわけだが、やや苦しい感は免れないし、これでは「地球が太陽の周りを回るのには24時間が必要よね。」という意味になっ

てしまう。同じ箇所のアマリ・ピュエ訳は——
 “ (...) la terre met vingt-quatre heures à faire sa révolution.” “Ah! vous parlez de faire des révolutions! Qu'on lui coupe la tête !” (地球は回転するのに24時間かかるわ。)
 「お前は革命を起そうと言っただね。この子の首を切っておしまい！」となっていて、こちらは“révolution”という語を2回使って語の2つの意味、「回転」と「革命」にかけているのだが、原文とはアプローチの仕方が違ってしまっている。ちなみにこの部分について邦訳を参照してみると、「地球が軸のまわりを回転するのに24時間ちよつきり——」「ちよつきりといえればこの子の首をちよつきりやっておやり！」(高橋康也訳。柳瀬尚紀訳も同様。)
 「地球はたしか24時間かかってひと回りするんでしょ。まさか——」「まさかりだって？ それでもって、こいつの首をちよつきりしておしまい」(矢川澄子訳)といった具合

である。

ところでテキストを精読していて驚いたのは、フランス語訳の中に原文には無い独自の音合わせがされている箇所があったことである。やはり「豚とこしょう」の中の有名な笑うチェシヤ猫についての公爵夫人とアリスの対話の部分で、アリスのセリフが原文では——

“I didn't know that Cheshire cats always grinned; in fact I didn't know that cats could grin.”とあるのに対してパリン訳は——
 “J'ignorais que les chats du Cheshire sourissent continuellement; je croyais les chats ennemis du ris et des souris; à vrai dire même je ne les savais pas capables de sourire.”

つまり、下線を引いた一文(私は、猫というものは、笑いとハツカネズミの敵だと思っていたわ。)が余分に付け加えられているのである。これは“ris” (古語で笑い)と“souris” (ハツカネズミ・古語では微笑)という2つの語に共通な“ris” (ハツカネズミ)という音合わせを入れるために殊更挿入されているのだが、あたかもキャロルの華麗な言葉遊びに魅せられた訳者が、自分でも母国語によるオリジナルの音合わせを考え出し翻訳にそっと忍び込ませて楽しんでいるかのようである。

次に音合わせ以外の例についてみてみよう。前述の謎々のシーンでアリスが時間の無駄遣いと嘆いた箇所はその後、時間についてのユニークな問答に発展する。まず原文は——

“If you knew Time as well as I do, you wouldn't talk about wasting it. It's him.”

次にパリゾン訳。

“Si vous connaissiez le Temps aussi bien que je le connais moi-même, vous ne parleriez pas de le gaspiller comme une chose. Le Temps est une personne.”

とパリゾン訳。

“Si vous connaissiez le Temps aussi bien que moi, vous ne parleriez pas de le gaspiller. On ne gaspille pas quelqu'un.”

この訳で原文と仏訳の人称代名詞に注目してみたい。原文は帽子屋が時間を「だ」ではなく“him”だと言っていることにより「もの」と「人」の区別をつけているのだが、フランス語の目的語 le は「もの」(男性名詞)も「人」も指してしまう。そこでパリゾン訳はわざわざ「『時間』をよく知っていたら」君も「『時間』を物のように無駄遣いするなんて言わないだろうよ。『時間』は人なんだから。」とし、ビュエ訳も「誰かを無駄遣いするなんてことは出来ないだよ。」としているのだ。更にフランス語には名詞に男女があることから、この場合パリゾンが使っている女性名詞 “une personne” (人) を代名詞で受けることがあれば女性形の “elle” または “a” になってしまう。この代名詞の男女の問題が混乱のもとになる場合もまた多い。一例を挙げれば、翻訳の魅力の虜になって、『アリス』の後に E・A・ポーの作品をボードレール訳で次々と読んでいった際にも、こ

の問題に何回となく出会った。例えばオーギュスト・デュパン3部作の1つ、『マリー・ロジェ殺害事件』の中の鄙には珍しい美人の香水屋の娘マリーが恋人の船乗りに惨殺される事件で、マリーの遺体が川に上がった際の状況の描写に20回近く「死体」を意味する語が出てくる。原文ではおおむね “the body” が当てられ、他に “the corpse”, “the deceased” (故人) が2回ずつ使われている。仏訳は順に “le corps”, “le cadavre”, “la defunte” とあり各語は原文とほぼニュアンスは変わらないが、最後の “le/la defunt(e)” (男女両形がある) 以外は男性名詞であるため冠詞が男性形 “le” になってしまう。当然代名詞で置き換える際も “il”, “le”, “celui” と男性形になってしまう。英語の “he”, “it” と比べて読んでいて落ち着きの悪さを感じるの否めない。代名詞に関して言えば、主語さえ省くことのできる多い日本語に対してフランス語では、主語は勿論、目的語をも律儀に代名詞に代えて省略せずに言う(英語はほぼその中間に位置すると見えるだろうか) など、興味深い点が多い。授業ではテキストを原文、仏訳、邦訳のトライアングルの形で検討しながら読み進め、また学生にも原文との比較で気づいた点を挙げて貰うなどしたのだが、その成果はそれだけでゆくに1冊の本が出来てしまうほどだった。「翻訳」という形で接する場合でも外国語には我々の好奇心を刺激して止まないものがある。そしてその間、あたかもセイレーンの歌声に引き込まれるようにして至福の時を過ごしていたことに改めて気づくのだ。